

『批判』の交換過程論について

——「商品世界＝世界市場」研究(3)——

元 田 厚 生

1 問題の所在

これまで筆者は、商品世界および世界市場にかんするマルクスの理論認識の発展が、商品（貨幣）理論の概念的編制に媒介され、『経済学批判』¹⁾（以下『批判』と略記）と『資本論』²⁾の相違となって現われているという観点から、『批判』の理論的特質の一端を解明してきた³⁾。とりわけ重視すべき論点は、商品世界の商品と貨幣への二重化の論理である。それは、その二重化を通して商品世界が社会的物質代謝過程を内面化するという理論的位置に対応して、『批判』と『資本論』の相違もその二重化の論理に集約的に現われていると理解するからである。したがって、『批判』における貨幣の必然的形成論が『批判』に独自の一般的な譲渡論として展開されていることの検討に続く課題は、本来、『資本論』における一般的な譲渡論すなわち交換過程論の検討ではあるが、以下のような理由からそれに先立って、小論においては『批判』交換過程分析の特質を解明することにした。

『資本論』交換過程論にたいする通説的見解⁴⁾によれば、そこでは交換過程の矛盾が交換過程の行き詰まりとして示され、その矛盾を媒介するものとして貨幣の必然的形成が論じられていると言う。このような捉え方は、疑問としなければならない。この捉え方では、貨幣析出の論理が、「彼らは心をつ

にして、自分たちの力と権力を獣たちに与える」と結ばれている意味⁵⁾を十分に明らかにするものとはいえないからである。しかし、このことが当面の問題ではない。通説的見解の前提とも出発点とも言うべき理解は、『資本論』における交換過程の矛盾を『批判』と同質の相互前提的悪循環あるいは相互排斥的矛盾として理解することである。相互前提的悪循環あるいは相互排斥的矛盾という捉え方は、『資本論』のつぎのような論点、すなわち、「商品は、自らを使用価値として実現しうるまえに、自らを価値として実現しなければならない」という論点の「使用価値としての実現」を、他人のための使用価値としての実現として捉えることに基づいている。なぜなら、もう1つの論点であるところの、「商品は、自らを価値として実現しうるまえに、自らが使用価値であることを実証しなければならない」という場合の「使用価値であることの実証」とは、明らかに他人のための使用価値であることの実証を意味しているからである。しかし、『資本論』の交換過程論は、交換過程の矛盾を相互前提的悪循環・相互排斥的矛盾として——したがって、使用価値としての実現を他人のための使用価値としての実現として——措定しているのであろうか。多いに疑問とするところである⁶⁾。なぜなら、それでは『資本論』の『批判』的解釈になってしまうからである。

たしかに『批判』においては、交換過程の矛盾は相互前提的悪循環として措定され、商品の使用価値としての実現は他人のための使用価値としての実現として規定されている。しかし問題は、『批判』においては、いかなる内的論理によって、矛盾がかかるものとして措定され、使用価値としての実現がかかるものとして規定されているかを問うことなしに、『資本論』の矛盾措定と同質の論理とすることである。

小論は、以上の点を踏まえ、特に『資本論』との異同を念頭におきながら、『批判』交換過程分析の特質、とりわけ相互前提的悪循環としての矛盾規定の意味を解明するものである。

したがって、小論の検討対象は、『批判』における交換過程分析の一部に限

定される。『批判』における交換過程の分析は、いわゆる相互前提的悪循環の措定に至る部分——すなわち、「はじめに突き当たった困難」——と、それらの矛盾は「こういう単純な様式ではあらわされえない」として論理を転換させる部分——すなわち、「新たな困難」——とに分かれる⁷⁾。しかし、『資本論』との関係で問題になるのは前者であるから、小論も前者に限定して検討を加えることにしよう。

行論の都合上、交換過程の矛盾を端的に表現している文章を——参考までに『資本論』のそれも合わせて——掲げておくことにしたい。

『資本論』の場合——

「商品は、自らを使用価値として実現 (realisieren) するまえに、自らを価値として実現 (realisieren) しなければならない。

他方では、商品は、自らを価値として実現するまえに、自らが使用価値であることを実証 (bewähren) しなければならない。」⁸⁾

『批判』の場合——

「商品は、交換価値として実現 (verwirklichen) されることによってはじめて使用価値として生成 (werden) するのだが、他方ではその外化 (Entäußerung) において使用価値として実証 (bewähren) することによってはじめて交換価値として実現 (verwirklichen) されるのである。」⁹⁾

「われわれがまずはじめにつきあたった困難は、商品は自分を交換価値として、対象化された労働としてあらわす (darstellen) ためには、あらかじめ使用価値として外化 (entäußern) され、人手に渡っていなければならないのに、使用価値としてのその外化 (Entäußerung) は、逆に交換価値としてのその定在 (Dasein) を前提する、ということであった。」¹⁰⁾

(以下では、商品の使用価値としての生成・実現を、使用価値の生成、使用価値生成、使用価値の実現、使用価値実現等として、商品の交換価値としての生成・実現を、交換価値の生成、交換価値生成、交換価値の実現、交換

価値実現等として省略して表現することがある。) ¹¹⁾

2 使用価値の生成・実現

『批判』交換過程の特徴は、それが商品[・]の[・]生成[・]——使用価値としての生成および交換価値としての生成——を軸に構成されていることである。まず、商品の使用価値としての生成について検討を加えよう。その検討を通して、『批判』の使用価値実現と『資本論』のそれとの相違の一端が明らかになるだろう。

では、商品の使用価値としての実現とは何か。『批判』はつぎのように言う、すなわち、商品は所有者にとってはむしろ非使用価値であり交換価値のたんなる素材的担い手、たんなる交換手段であるから、「使用価値としては、それ（商品——引用者）はこれから生成しなければならない」¹²⁾、と。ここまでは『資本論』と同工異曲といえるだろう。しかし『批判』は、商品の使用価値としての生成を二重の生成として説く。二重の生成とは、「他の人々にとっての使用価値」つまり他人のための使用価値としての生成と、「所有者自身にとっての使用価値」としての生成とである。このような使用価値の二重生成視点は、注目に値するだろう。それは、これまでの『資本論』——交換過程章——解釈が「商品の使用価値としての実現」を単に他人のための使用価値実現として捉えてきたことにたいする反省をこめてである。ついでに言えば、『批判』には、商品に欠如している他の商品体にたいする具体的感覚を補う商品所有者が登場しないことも¹³⁾、合わせて留意されるべきであろう。さて、使用価値の二重生成視点とは如何に解すべきであるのか。それは、商品を潜在的・可能的使用価値とでも言うべき相において観ていると解すべきであろう。なぜなら、商品を潜在的可能的使用価値とすれば、それが現実的使用価値に生成する道は二重になるからである。つまり、所有者にとっての使用価値生成の道と他人にとっての使用価値生成の道という二筋になるからであ

る。

しかし『批判』においては、使用価値の二重生成論は貫徹せず、結局、他人のための使用価値の生成に一本化されてしまう。

まず、『批判』の場合、使用価値の二重生成をどのように位置づけているのか、『資本論』と対比しながらみることにしよう。『批判』は、商品の使用価値としての生成を指摘して直ちに、「しかもまずもって他の人々にとっての使用価値としてである。……他方では、商品は所有者自身にとっての使用価値にならなければならない」¹⁴⁾、と続けている。この展開も、『資本論』と対比するとき、興味深い相違を見出すことになる。『資本論』の場合には、「彼（商品所有者—引用者）の商品は、彼にとっては直接的な使用価値をもっていない。それがもっているのは、他人にとっての使用価値である。彼にとっては、それは、直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである」、と述べ、直ぐ続けて、「だからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値をもつ商品とひきかえに、譲渡しようとするのである」¹⁵⁾（傍点は引用者）と述べている。つまり、『批判』の場合には、使用価値の二重生成論であるとはいえ、他人のための使用価値生成を優先的に、所有者のための使用価値生成を副次的に位置づけているのに対して、『資本論』の場合には、使用価値の二重生成視点は姿を消し、「だからこそ」として所有者のための使用価値生成を、すなわち、所有者を「満足させる使用価値をもつ商品」との「ひきかえ」を強調している点が対照的である。『資本論』はさておき、では『批判』の場合、何故に他人のための使用価値生成が優先的位置を占めることになるのであろうか。

その理由は、『批判』においては、使用価値生成の契機を「特殊的欲望」と規定し、したがって使用価値生成の起点とも言うべき商品を「特殊的使用価値」として規定している点にある。まず、使用価値生成の契機を「特殊的欲望」と規定していることは、「使用価値として生成するためには、商品は自分が充足の対象であるような特殊的欲望に出会わなければならない」¹⁶⁾、という

叙述に示されている。使用価値生成の契機を「特殊的欲望」と規定するということは、同時に、生成の起点に位置する商品の可能的・潜在的使用価値とも言うべきものを、「特殊的欲望」を充足する「特殊的使用価値」の相において捉えていることを意味するだろう。事実、『批判』は、「使用価値としての諸商品の全面的外化においては、諸商品は、その特有の諸属性によって特殊的欲望を充足する特殊な物としてのその素材的相違に依じて、互いに関連づけられる」¹⁷⁾、と述べているのである。このように、使用価値生成の起点を特殊的使用価値として、その生成の契機を特殊的欲望として規定すれば、使用価値の二重生成論も、結局、他人のための使用価値の生成に解消されてしまうだろう。それは、商品が他人のための使用価値として生成するときの運動様式によってである。つぎに、その点を見ることにしよう。

いま、使用価値生成の起点に特殊的使用価値が存ということは、その使用価値が、それを非使用価値とする所有者の許において、潜在的な他人のための使用価値という状態に存することを意味するだろう。したがって、その特殊的使用価値が現実的使用価値として生成するためには、それを充足の対象とする特殊的欲望に出会わなければならない、それゆえ所有者を変えなければならない——この場合、所有者を変える動機が商品の他人のための使用価値としての生成にあることに留意すべきである——。ここに、他人のための使用価値生成に特有な運動として、商品の位置転換・持ち手変換・使用価値としての外化などが措定される理由がある。商品の使用価値としての外化(Entäußerung)とは、つぎの文章における商品の形態転換に同じである。すなわち、「諸商品が使用価値としてのその生成中にはいりこむ唯一の形態転換(Formwechsel)は、それが、その所有者にとって非使用価値、その非所有者にとって使用価値であった、その形態的定在の揚棄である」¹⁸⁾、という場合の形態転換である。つまり、特殊的使用価値・「商品」が、潜在的な他人のための使用価値・「非所有者にとって使用価値」という形態から、現実的な他人のための使用価値・所有者にとって使用価値である形態へ転換する

ことである。したがって、商品の使用価値としての外化・持ち手変換・位置転換は、いずれも同じ運動を意味すると同時に、運動はいずれも商品の側から捉えられている。つまり、所有者の視点に立てば、運動は商品が所有者のための使用価値に生成することを動機とするのにたいして、他人のための使用価値生成は、潜在的に他人のための使用価値である商品の視点から、運動が捉えられているからである。

このように、商品の使用価値生成が、特殊的使用価値を起点に・特殊的欲望を契機に・持ち手変換を運動として構成されることによって、所有者のための使用価値生成は、逆方向ではあるが——他者の商品がこちら側に移って来て現実的に他人のための使用価値として生成するから——、他人のための使用価値生成と同一の運動をすることになる。それゆえ、両者は区別されず、結局、他人のための使用価値生成に解消されてしまうのである。

したがって『批判』が、使用価値の二重生成に続けて、「使用価値として生成するためには、商品は自分が充足の対象であるような特殊的欲望に出会わなければならない。だから諸商品の使用価値が全面的に位置を転換し、それが、交換手段である人の手からそれを使用対象とする人の手に移ることによって、使用価値として生成するのである」¹⁹⁾、という場合の使用価値の生成とは、特殊的使用価値であるところの商品が他人のための使用価値として生成することであって、所有者のための使用価値の生成はその対極において、すなわち、他商品が他人のための使用価値として生成する点において、捉えられているにすぎないのである。

しかし、ここではつぎの点に留意すべきであろう。それは、譲渡される商品の規定性が、他人のための使用価値生成視点と所有者のための使用価値視点とのいずれに立つかによって、異なるということである。所有者のための使用価値生成視点に立てば、運動の推進動機は商品の所有者が必要とする使用価値としての生成であるから、運動は「商品を、自分を（所有者を——引用者）満足させる使用価値をもつ商品とひきかえに、譲渡」することになる。

この場合、譲渡するのは「交換手段であるという使用価値」という規定性における商品である（『資本論』の場合）。この場合、特殊的使用価値の相において現われるのは他商品であり、他人のための使用価値生成は逆方向において、つまり他商品の潜在的な他人のための使用価値が生成するものとして現われることは言うまでもない。さて、他人のための使用価値生成視点に立てば、譲渡される商品の性格が如何になるかといえ、それが他人のための使用価値という規定性における商品であることは如上の通りである²⁰⁾。

最後に、「使用価値としての実現 (verwirklichen)」の意味について確認しておけば、それは、商品が他人のための使用価値として生成することに同じである。そして、商品が他人のための使用価値として生成（実現）することの意義について、『批判』はつぎのように述べている。すなわち、「商品はそれ自身の所有者にとっての使用価値ではないのであるから、他の商品の所有者にとっての使用価値である。そうでなければ、彼の労働は無用な労働であったのであり、したがってその成果は商品ではなかったわけである」²¹⁾と、あるいは、「諸商品のこのような全面的[・]外化[・]によってはじめて、それらに含まれている労働が有用労働に生成 (werden) する」²²⁾と。商品の使用価値の社会的規定性、つまり商品が商品であるためには他人のための使用価値でなければならないことと、商品が他人のための使用価値として生成（実現）することによって商品（この場合は特殊的使用価値）に「含まれている労働が有用労働に生成する」ことが述べられている。この点は、交換価値生成において重要な意味をもってくる。

さてこれまでのところ、『批判』に特有な使用価値生成論の検討によって、その特徴が他人のための使用価値生成（実現）にあることが明らかにされた。新たな論点の検討に移る前につぎの点を指摘しておきたい。それは、交換過程の分析が自己商品譲渡と他商品取得の関係分析、あるいはそこに潜む矛盾の解明にあるとすれば、これまでの『批判』交換過程の分析は自己商品の譲渡に限定されているということである。たとえば、商品が使用価値として二

重に生成することとは、結局、一方では自己商品が他人のための使用価値として生成（自己商品の譲渡）し、他方では他人の商品が別の所有者のための使用価値として生成（他人商品の譲渡）することとして論じられてきた。では、他人の商品の取得の論理は、どのようにして展開されることになるのであろうか。問題点として残しておくことにしよう。

3 交換価値の生成・実現

使用価値の生成論は、つぎのように締め括られている ——

「諸商品の使用価値としての生成は、その全面的外化、それが交換過程に入ることを予想しているが、しかし交換のための商品の定在は、交換価値としてのその定在である。したがって、使用価値として自己を実現するためには、商品は交換価値として自己を実現しなければならない。」²³⁾ (傍点は引用者)

以下、この叙述において提示されている2論点について、すなわち、商品の交換価値としての実現についておよび使用価値の実現の前提条件としての交換価値の実現ということについて、各々検討することにする。まず、第1の論点である商品の交換価値としての実現の意味について取上げよう。

『批判』においては、「商品は交換価値として自己を実現 (verwirklichen) しなければならない」と言う場合の「実現」を、どのような語として用いているのであろうか。まず、その用語法について確認しよう。上の引用文についてみれば、その趣旨は、商品が使用価値として実現されるためには交換過程に入らなければならないこと、そしてそのためには、商品は自己を交換のための「定在」に・交換価値としての「定在」にしなければならない、ということにある。ここでは、商品の「交換価値としての定在」、あるいは「交換のための商品の定在」と同じ意味で、商品の「交換価値としての実現」と表現されていることは明白である。別の叙述においても、「使用価値としての商

品の外化は、逆に交換価値としてのその定在を前提する」²⁴⁾、というように表現されている。また、交換価値としての実現と同趣旨で「交換価値としての表示 (darstellen)」という用法もみられる。たとえば、「商品は、自分を交換価値として、対象化された労働として表示する」²⁵⁾とか、「商品が商品にたいして交換価値として表示される等式」²⁶⁾というように、交換価値としての実現と交換価値としての表示とは、同じ意味で用いられている。

このようにして、『批判』における商品の交換価値としての実現とは、交換価値としての定在、交換価値としての表示のことであり、『資本論』における価値形態の意味であることが判明した。以上の用語法からすでに、『批判』における交換価値の実現が、商品の価値としての能力の実証、つまり、商品は価値として他商品と同質同等であれば任意の他商品と置換可能であるということの実証ではなく、商品の他商品との同質同等であることの表示を意味するものであることが、示唆されている。

さてつぎに、用語法をはなれ、商品の交換価値の実現＝表示ということが、『批判』においては、商品の如何なる事態を意味するものであるのか検討することにしよう。なぜなら、交換価値の実現＝表示ということが、『資本論』の価値形態の意味と推測されても、少しも要領を得ないからである。

まず、『批判』は、商品が自己を交換価値として実現することを、商品の交換価値としての「生成 (werden)」と言い換えている。この点の検討から始めよう。まず、関係する叙述を引用しよう――

「たしかに商品は、……それが対象化された労働時間であるかぎり、交換価値である。しかしそれは、直接そのままでは、特殊的な内容をもつ個人的労働の対象化された時間にすぎず、一般的労働時間ではない。それゆえそれは、直接には交換価値ではないのであり、これからそういうものに生成しなければならない。」²⁷⁾

この叙述において、商品は「直接には交換価値ではない」、なぜなら、商品は、「直接そのままでは、特殊的な内容をもつ個人的労働の対象化された時間」

にすぎないから、としている点に注意すべきであろう。ここでは明らかに、商品の直接的な存在姿態との関係において、商品の交換価値としての生成を論じている。この場合、「特殊な内容をもつ個人的労働」とは、「特殊的使用価値で表示されている個人的労働」²⁸⁾のことであるから、商品が「直接には交換価値ではない」ということは、商品は「直接には」特殊的使用価値ではない、という意味である。では、特殊的使用価値という姿態にある商品が、交換価値として生成するということは、一体、何を意味するのであろうか。上の引用文においてすでに、特殊の個人的労働（時間）の一般の労働（時間）への転換が、示唆されている（尚、生成の論理については次節で扱い、ここでは生成の結果に的を絞ることにする）。別の叙述を引用し、意味を明確にしよう――

「個々人の労働が、交換価値に結果(resultieren)するためには、一般的等価物に、すなわち個人の労働時間の一般の労働時間としての表示に、……結果しなければならない。」²⁹⁾

ここでは、特殊の個人的労働（時間）の一般の労働（時間）への転換が、より正確に、個人の労働時間の「一般の労働時間としての表示」として示されている。元々『批判』においては、交換価値・一般の労働時間・一般的等価物の三者が、同義として扱われている。したがって、交換価値としての実現・生成とは、はじめから一般の労働時間としての表示を意味すると言える。しかし、視点はあくまでも、直接的には特殊的使用価値にすぎない商品の交換価値としての生成・実現・表示の含意を探ることである。では、特殊的使用価値である商品の一般の労働時間としての表示とは何か。それは、商品の「一般的使用価値」としての表示のことである。『批判』は、この一般的使用価値について、「商品が商品として内包する矛盾、すなわち、特殊的使用価値であると同時に一般的等価物であり、したがってまた、だれにとってももの使用価値、一般的使用価値である、という矛盾」³⁰⁾というように表現している。一般的使用価値とは、交換手段としての使用価値のことであるから、商品の

一般的労働時間としての表示、つまり一般的使用価値としての表示とは、あくまでも商品の交換手段としての行使——商品の価値としての能力の実証——に先立つ論理であることが、ここでも確認されよう。

しかし、『批判』の交換過程分析においては、一般的使用価値という語句は用いられていない。交換過程分析の1つの結語であるところの「等置」と「非等置」の連関に対応させて、商品の一般的労働時間としての表示を考えれば、労働の社会的性格規定としての「同等性 (Gleichheit)」の表示がより相応しいだろう。該当箇所を引用することにしよう——

「労働の無差別な単純性とは、様々な個人の労働の同等性であり、彼らの労働が同等なものとして、しかもすべての労働が同種の労働に事実上還元されることによって、相互に関連しあうことである。各個人の労働は、交換価値において表示されるかぎり、同等性という社会的性格をもち、それが同等な労働として、他のすべての個人の労働と関連させられているかぎりだけで、この労働は交換価値において表示される。」³¹⁾

ここでは、個人的労働の相互的関連が労働の同等性としての関連であること、および、個人的労働の交換価値における表示と個人的労働が同等性という社会的性格をもつこととは同一の事態であることが語られている。したがって、商品の交換価値としての生成は、特殊的使用価値で表示されている個人的労働の一般的労働としての表示であるだけでなく、その個人的労働の同等性としての表示でもあることが、語られているのである。

これまでの検討によって、つぎのことが明らかになった。

まず第1に、商品の交換価値としての生成・実現とは、事実上——『批判』叙述において明示的ではないが——商品が他の諸商品に対して同等性として表示されることの意味であること。この商品の交換価値としての生成・実現を、同等性としての表示に換言して理解することは、「等置 (Gleichsetzung)」と「非等置 (Ungleichsetzung)」の相互前提的悪循環の理解を、極めて容易なものとする。すなわち、諸商品の等置の連関とは、諸

商品の同等性としての連関であり、諸商品の非等置の連関とは、諸商品を特殊的使用価値として区別する連関である、とすれば、それらの相互前提的關係とは、つぎのようになるだろう。すなわち、諸商品は同等性として表示されるためには、特殊的使用価値（という外皮）を脱ぎ捨て（abstreifen）なければならない、特殊的使用価値を脱ぎ捨てるためには、逆に、同等性として表示されなければならない、と。

第2に、『批判』における交換価値の実現（verwirklichen）は、商品の同等性の表示の意味であるから、同等性の表示を前提し、いわば表示後の事態というべき商品の価値としての能力の実証——任意の他商品への置換能力の実証——を意味しないがゆえに、『資本論』における価値としての実現（realisieren）とは、別の概念規定であること。『批判』交換過程分析が、商品の価値としての能力の実証を必然的に包含するところの諸商品の譲渡と他商品取得の関係論分析から抽象された理論次元において展開されていることは、その交換過程分析の位置を考えれば、首肯しうるものである。交換過程に先立つ分析——筆者が、一般的等価物生成論の起点と位置づけた分析³²⁾——の結語は、交換価値＝一般的等価物の表現の固定化の必要性という問題提起でもあった。つまり、その分析においては、「全体的価値形態」の左辺に立つ商品は交換価値＝一般的等価物としてあますところなく表現されること、およびいずれの商品もその価値等式の左辺に立ちうることが明らかにされたのである。したがって、その問題提起を受けてなされる交換過程の分析が、本来の交換過程論の水準からすれば一段抽象化された次元において、つまり交換価値の表現をめぐる問題を軸に展開されることは、至極当然のことと言えるだろう。

したがって、『批判』交換過程のかかる抽象性からすれば、つぎに示す交換価値の「実証（betätigen）」はそれ自体、交換過程の主調をなすものではなく³³⁾、況んや交換価値の実現（verwirklichen）および表示（darstellen）を意味するものでないことは、明らかである。交換価値の「実証」という表現は、

唯一、つぎのように使用されているにすぎない、——「一商品が交換価値であることを実証するのは、むしろそれが、他の商品の所有者にとって使用価値であるかどうかにかかわりなく、等価物としての他のどんな商品の一定分量とでも任意に置き換えられることによってである。」³⁴⁾

つぎに本節の冒頭において提示した第2の論点、使用価値としての実現は交換価値としての実現を前提とすることの意味について触れることにしよう。いまや、「使用価値として自己を実現するためには、商品は交換価値として自己を実現しなければならない」という文章の意味は、明らかである。それは第1に、直接的には、商品が使用価値として生成・実現するためには、商品の交換価値としての表示が必要であることを意味している。第2に、交換過程分析の『批判』に占める位置からすれば、商品が譲渡されるためには、商品は同等性として表示されねばならないことを意味している。第3に、「等置」と「非等置」の相互前提的連関の観点からすれば、それは、商品の特殊的使用価値の脱ぎ捨ては商品の同等性表示を前提すること、つまり、商品の「非等置」は「等置」を前提することを意味することになる。

さて最後に、前節の末尾において提起されていた問題について検討することにしたい。それは、他人のための使用価値の実現論として展開された『批判』の使用価値生成論には、譲渡の論理はあるが、対応する他商品取得の論理が見当たらない、という問題である。この問題は、『批判』における商品の交換価値の実現の規定内容が明らかになった現在もなお、解決されていない。

『批判』における交換価値の実現が、価値能力の実証、すなわち任意の他商品の取得を意味しないことが明らかにされた。したがって、『批判』交換過程は、譲渡に対応する取得の論理を具備するものではない、と言わざるをえないのである。この点を象徴する叙述がある。それを引用すれば——

「一商品は、それがその人にとって使用価値、すなわち特殊な欲望の対象であるような人にだけ使用価値として譲渡されうる。他方では、一商品は他の一商品と引き換えにだけ譲渡される。あるいは他の商品の所有者の側

に立てば、彼もまた、自分の商品をそれが対象となっている特殊な欲望と接触させることによってだけ、それを譲渡、すなわち実現することができる。」³⁵⁾ (傍点は引用者)

ここには、『批判』に特徴的である一方的譲渡の論理が、如実に示されている。まず、商品は「それがその人にとって使用価値」であるような人にだけ譲渡される、すなわち、商品は他人のための使用価値として譲渡される、と言い、ついで、「他の一商品と引き換えにだけ譲渡される」と言う。すでに述べたように、譲渡される商品が、交換手段としての使用価値という規定性にあれば、「引き換え」られる商品は、所有者のための使用価値をもつ商品になるだろう。それだけでなく、交換手段としての使用価値として商品が譲渡されるとすれば、まず問題になるのは、如何なる商品が取得できるかということであって、譲渡する商品の使用価値が他者の「特殊的欲望の対象」であるか否かは、さしあたり問題にはならないのである。さて、『批判』叙述に戻れば、他商品と「引き換えにだけ譲渡される」ことは、どのように展開されているかと言え、その他商品の所有者の側から、その他商品の所有者も「特殊的欲望」にたいして商品を譲渡し、他人のための使用価値として実現する、と説いているのである。つまり、ある所有者の他商品取得を、反対側から、他商品所有者の商品譲渡によって説明しているのである。これこそ、取得の論理を欠く一方的譲渡の論理である。この一方的譲渡の論理は、他人のための使用価値実現論の必然的産物と言うべきであろう。また、その他人のための使用価値実現論も、「商品は、他の商品の所有者にとっては、それが彼にとって使用価値であるかぎりだけで商品に生成する」という観点の具体化であることは、次節において検討することにしたい。それはともあれ、ここでは、『批判』の交換過程分析の抽象性を超えて、商品譲渡と他商品取得の論点が、しかも一方的譲渡という非合理的展開を伴いながら、包摂されていることを確認することができるのである。

4 交換価値実現の前提条件としての使用価値実現

本節では、使用価値実現が交換価値実現・表示の前提条件をなすという論点を検討する。ここでも他人のための使用価値実現論に起因する論理の混濁を見出すことになるだろう。

さて、商品の交換価値表示の前提条件として使用価値実現が位置する理由は、それが商品の交換価値としての生成を媒介する契機とされていることにある。商品が交換価値として生成することとは、商品に対象化されている労働（時間）が個人的特殊的労働（時間）から社会的一般的労働（時間）に生成することに同じであり、その生成は商品に含まれている労働が、社会的有用労働であるという「素材的条件」を具備している場合にのみ行われる。その「素材的条件」の有無の判定こそ、商品の使用価値としての実現の可否である。なぜなら、商品は他人のための使用価値として実現化されることによって、それに含まれている労働が有用労働に生成するからである。以上が『批判』における交換価値生成の論理とその媒介契機としての使用価値実現の位置づけである。『批判』の具体的記述をみることにしよう――

「商品は、……その外化において使用価値として実証 (bewähren) することによってはじめて交換価値として実現されうるのである。」³⁶⁾

「商品は自分を交換価値として、対象化された労働として表示するためには、あらかじめ使用価値として外化され、入手に渡っていなければならない」³⁷⁾（傍点は引用者）。

この前後二つの記述には、その意味内容に若干の差異がある。前文は、外化途上における使用価値の実証を示し、後文は、外化後の使用価値の実現を示しているかのようである。いずれが『批判』交換過程の立論様式に近似的かと言え、それは後者である。なぜなら、『批判』の使用価値実現論は他人のための使用価値実現論として展開されているからである。商品が他人のた

めの使用価値として実現されるためには、持ち手を変えそれを必要とする「人手に渡っていないなければならない」からである。しかしそうなれば、引用記述はつぎのような非合理を孕む。なぜなら、商品は自らを交換価値として表示するためには、あらかじめ人手に渡っていないなければならないからである。時系列的前後関係でない論理的前後関係としても、商品の交換価値としての表示が商品の他者への引き渡しを前提にするとすれば、商品には始めから交換価値表示の必要は存在せず、したがって交換価値表示の論理も存在しないことになるだろう。

これは、どのように理解すべきであるのか。『批判』交換過程の展開軸でもある商品生成論を手掛りに考えてみたい。まず、商品生成論に触れている叙述を引用すればつぎの通りである——

「……商品は、他の商品の所有者にとっては、それが彼にとっての使用価値であるかぎりだけで商品に生成し、またその商品自体の所有者にとっては、それが他人にとっての商品であるかぎりだけで交換価値に生成する。」³⁸⁾

一般に、「商品は、他人のための使用価値でなければ、価値でもない」、と言う場合の他人のための使用価値規定は、所有者にとって商品が直接的使用価値をもたないことに相即するところの商品の即自的規定である。商品は、対自的には価値つまり交換手段としての使用価値である。この交換手段としての使用価値が、譲渡され、対他的に行使され、社会的に実現されようとするとき、商品の即自であるところの潜在的に他人のための使用価値であることが、始めて問われるのである。しかし、『批判』においては、商品の即自的規定であるところの他人のための使用価値規定が交換手段としての使用価値の譲渡・行使・実現から分離され、それ自体として展開される。すなわち、他人のための使用価値実現論として展開された商品の使用価値生成論である。換言すれば、「商品は、他の商品の所有者にとっては、それが彼にとっての商品であるかぎりだけで商品に生成する」ことの自立的先行的展開である

——これが、一方的譲渡の論理として顕在化すること、すでにみた通りである——。しかし、他人のための使用価値規定が自立的先行的に展開されることによって、商品が商品として生成するためには、二条件の充足が必要になっていることに留意しなければならない。すなわち、商品の他人のための使用価値としての実現と、商品の交換価値としての実現という二条件の充足である。したがって『批判』が、「商品所有者にとっては、それ（商品——引用者）が他人にとっての商品であるかぎりだけで交換価値に生成する」ことの論証をする場合の商品、つまり、商品の交換価値実現の対他的規定・社会的被規定を論述する場合の商品においては、その他人のための使用価値という社会的規定は、交換手段としての使用価値の譲渡・行使・実現の際に顕在化するところの商品の即自規定というよりもむしろ、すでに他人のための使用価値実現論において措定されたところの商品生成の自立的条件としての他人のための使用価値規定である。そのことが、前掲引用の後文において、商品の交換価値としての実現（表示）に先立って、商品は「あらかじめ……人手に渡っていなければならない」という非合理的な叙述となって現われているのである。このように『批判』においては、商品生成のために充足すべき一方の条件（他人のための使用価値規定）と他方の条件（交換手段としての使用価値規定）という商品生成の二条件は、統一的に展開されず、両者は自立的に分離して展開されるため、両者は不可分にして相互排斥的關係、あるいは相互前提的悪循環の關係として措定されることになったのである。

したがって、前掲引用の後文については、『批判』交換過程分析の抽象性に定位して、つまり譲渡・取得の關係論分析としては未だ抽象的な交換過程論であることを踏まえて、その意味内容を判断しなければならない。しかし、それは同時に、引用後文を『批判』に不適切な論述として切り捨て、引用前文を『批判』により内在的な論述とするものではない。前文は、交換途上における、したがって交換過程上における使用価値の実証を含意することにおいて、『資本論』の使用価値実証規定と同質の論理を示してはいる。しかし、

交換途上における使用価値の実証規定は、交換手段としての使用価値の譲渡の論理に対応・付随するものであるがゆえ、その論理を欠く『批判』に内在的な規定とは看なしえないからである。かくして、『批判』交換過程分析の抽象性に定位して、両文の意味を推定すれば、それは共に、商品の交換価値としての表示がその商品の他人のための使用価値の承認を必要とすることを述べている、と解することができる。それはまた、「等置」と「非等置」の相互前提的關係のレベルにおいては、商品の同質性表示はその特殊的使用価値の脱ぎ捨てを前提とすること、つまり商品の「等置」はその「非等置」を前提とすることを意味するのである。

5 結びに代えて

すでに、小論の課題である『批判』における交換過程の矛盾措定、つまり相互前提的悪循環としての矛盾措定の意味は、明らかになったので、最後に、交換過程の立論様式から窺い知ることのできる商品世界の観方について言及することにしよう。

商品の使用価値としての実現と交換価値としての実現とが、相互前提的悪循環をなすという捉え方は、商品世界を互酬性＝交互性(Wechselseitigkeit)の見地から捉えていることを意味する。互酬性とは、『経済学批判』原初稿において、「交換行為のうちでは各主体は自己目的ではあるにすぎないこと、各主体は他の主体にたいする手段であるにすぎないこと、さいごに、各主体が手段であると同時に目的であり、しかも、各主体は他人のための手段となることによってのみ自己の目的を達し、自己の目的を達するかぎりでのみ〔他人のための——引用者〕手段となるといった互酬性」³⁹⁾と述べられていることを意味する。この場合、「各主体は他人のための手段となることによってのみ自己の目的を達する」ことが、商品は他人のための使用価値として実現されることによってのみ交換価値として実現されるという『批判』の論理に対

応し、「自己の目的を達するかぎりでのみ〔他人のための〕手段となる」ことが、商品は交換価値として実現されることによつてのみ他人のための使用価値として実現されるという『批判』の論理に対応していることは、明らかである。そして、各主体の「目的」と「手段」は、正に『批判』におけると同様に、相互に前提しあう悪循環の関係にあるのである。

このような互酬性の見地は、『資本論』に踏襲されているのであろうか。これがつぎの課題である。

註

- 1) Marx, K., *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Marx-Engels Werke ; Bd. 13, Dietz Verlag, Berlin, 1974. (杉本俊郎訳, 『経済学批判』, 国民文庫) (以下, 『経済学批判』からの引用は, 原書を Kr. 訳書を訳と略記してページ数を示す。但し, 訳文は必ずしも訳書に同じではない。)
- 2) Marx, K. *Das Kapital*, Erster Band, Marx-Engels Werke ; Bd. 23, Dietz Verlag, Berlin, 1962. (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳, 『資本論』, 第1巻, 大月書店) (以下, 『資本論』からの引用は, 原書を K.Bd.I 訳書を訳と略記してページ数を示す。但し, 訳文は必ずしも訳書に同じではない。)
- 3) 「『批判』商品概念の特質について——「商品世界=世界市場」研究(1)——」(札幌大学「経済と経営」第10巻第4号所収) (以下, 第1論文と略す), および「貨幣概念と世界市場——「商品世界=世界市場研究」(2)——」(札幌大学「経済と経営」第14巻第2号所収) (以下, 第2論文と略す)
- 4) 久留間鯨造氏の『価値形態論と交換過程論』(岩波書店)に代表される, 『資本論』「交換過程」章にかんする見解。
- 5) 富塚良三氏は, この点について, 「いわば, すべての商品が潜在的に, あるいは可能性としてもつ等価性を脱ぎ捨てて, それをすべて排除された一商品に付着せしめるという共同作業をおこない, かくしてそれを一般的等価たらしめ」る, と説明される(富塚良三『経済原論』, 有斐閣, 48ページ)。しかし, 「いわば」とされているように, 富塚氏の「全面的交換の矛盾」との論理的関係は, 必ずしも明確ではないように思う。それは富塚氏の「全面的交換の矛盾」は商品の価値としての実現と使用価値としての実現との相互前提的悪循環であるから, 価値としての実現だけが何故に断念されなけ

ればならないのか——何故に商品は「等価性を脱ぎ捨て」ねばならないが、判然としないのである。しかしそれは、根本的には、富塚氏の問題提起——「開展された価値形態」の逆転による「一般的価値形態」の成立は、価値形態の対極性というマルクスの見地からして疑問であるという問題提起（主として同氏の『恐慌論研究』所収の「価値形態論と交換過程論」において詳述）——にかかわることでもあるので、その点についてはまた別の機会に論ずることにしたい。

- 6) 『資本論』の交換過程論については、別稿を予定している。
- 7) この点については、拙稿（第2論文）を参照されたい。
- 8) K. Bd.I, S.100（訳、115 ページ。）
- 9) Kr., S. 29（訳、46 ページ）
- 10) Kr., S. 31（訳、48 ページ）
- 11) これはあくまでも表記上のことであって、商品の貨幣への転化を意味する「価値の実現」でも、消費過程における「使用価値の実現」でもない（久留間、前掲書、14～15 ページ）。
- 12) Kr., S. 28（訳、44 ページ。）

平田清明氏は、この文章における商品の使用価値としての生成を「交換手段としての使用価値」の生成のこととして理解される。すなわち、「この交換手段としての使用価値つまり形態的使用価値は、かの抽象としての交換関係の考察にあたっては、考察の俎上にのぼりえないものである。商品所持者の存在とその意識的活動が捨象されている次元においては、それはいまだ問題となりえないものである。それは、諸商品の現実的な交換という関係行為＝交換過程において、はじめて問題となるのであり、事実この交換過程において、まさに商品は、この交換手段としての使用価値として、あらたに『生成』しなければならないのである。『〔この意味での〕使用価値として、商品は、〔交換過程において〕これから生成しなければならないのである。』」と述べている。（平田清明『経済学と歴史認識』、岩波書店、275 ページ。但し、傍点のうち黒点は平田氏の強調であり、白抜丸は『批判』の強調であり、〔 〕の挿入は平田氏による。）しかし、『批判』のこの文章を、「交換手段としての使用価値」の生成を論述するものとして解することは、困難である。『批判』の叙述は、行論が示すように、「使用価値としては、それ（商品——引用者）はこれから生成しなければならないのである。しかもまずもって他の人々にとっての使用価値としてである」、というように、商品の使用価値生成を「他の人々にとっての使用価値として」の生成としているからである。

「交換手段としての使用価値」の「生成」とは、商品が所有者にとって交換手段とし

ての能力を発揮・実現することであるから、それは『資本論』における「価値としての実現」を、『批判』における交換価値としての「実証」（後述）を意味することになる。平田氏は、『批判』のこの一文において、「価値としての実現」が論述されているとでも解されるのであろうか。それはおくとしても、平田氏のような捉え方をすれば、「他の人々にとっての使用価値として」の生成という『批判』の論点は、消失してしまうことになるだろう。事実、平田氏は、続けて、「ここに商品は、使用価値(平田氏の場合、「交換手段としての使用価値」を意味する——引用者)としてあらたに『生成』しなければならないのであるが、そのためには、その使用価値が、それを必要とし欲求する人にとって、現実上使用価値としての使用価値であらねばならない。換言すれば、その所持者にとってその商品が右に述べた意味での形態的使用価値として生成するためには、それが他人にとっての使用価値、他人にとって現実的な『使用対象』＝『富の内容』でなければならない」（前掲書、同ページ）と述べている。つまり、平田氏の場合、他人のための使用価値という論点を、商品が「交換手段としての使用価値」として生成する場合の条件として捉えるのである。そのような捉え方は、『批判』叙述の解釈としては、当を得たものとはいえないだろう。

- 13) 『批判』の場合、商品所有者を「交換過程の意識的な担い手」と規定するにとどまる (Kr., S. 28 訳, 44 ページ)。
- 14) Kr., S. 28 (訳, 44 ページ。)
- 15) K. Bd. I, S. 100 (訳, 114 ページ。)
- 16) Kr., S. 29 (訳, 44 ページ。)
- 17) Kr., S. 30 (訳, 46～47 ページ。)
- 18) Kr., S. 29 (訳, 45 ページ。)
- 19) Kr., S. 29 (訳, 44～45 ページ。)
- 20) 平田氏は、『批判』の論述を全く逆に解される。すなわち、「自分の所持する商品が自分にとって、その形態的使用価値(交換手段としての使用価値——引用者)として実現するだけでなく、現実的使用価値として実現しなければならない」（前掲書、275 ページ）、と『批判』は展開していると言うのである。このような『批判』の捉え方が、『批判』の他人のための使用価値生成という論点の閑却に起因すること、すでに触れた通りである。
- 21) Kr., S. 28 (訳, 44 ページ。)
- 22) Kr., S. 29 (訳, 45 ページ。)
- 23) Kr., S. 29 (訳, 45 ページ。)

- 24) Kr., S. 31 (訳, 48 ページ。)
- 25) Kr., S. 31 (訳, 48 ページ。)
- 26) Kr., S. 33 (訳, 52 ページ。)
- 27) Kr., S. 29 (訳, 46 ページ。)
- 28) Kr., S. 31 (訳, 49 ページ。)
- 29) Kr., S. 20 (訳, 31 ページ。)
- 30) Kr., S. 34 (訳, 53 ページ。)
- 31) Kr., S. 19 (訳, 30 ページ。)
- 32) 拙稿 (第2論文) を参照されたい。
- 33) 拙稿 (第2論文), 40~41 ページには, この点の配慮を欠く表現がある。
- 34) Kr., S. 30 (訳, 47 ページ。)

平田氏は、『批判』交換過程分析の抽象性を看過している。たとえば、この交換価値としての実証を含む『批判』叙述を引用し、「読者はここに、『資本論』のマルクスが交換過程の矛盾の第二記述において『一般的社会的過程』と命名するものを、見いだすであろう」(前掲書, 279 ページ), と言われる。『批判』における交換価値としての実証 (betätigen) が、『資本論』において価値としての実現 (realisieren) として表記されていることは、疑問の余地はない。しかし、問題は、『批判』と『資本論』に類似した用語法が見出せるということと、『批判』の内在的論理が示す概念規定とを、混同してはならないということである。平田氏は、「交換価値とは、本書の読者がすでに知っているように、何よりもまず、他商品に対する購買＝支配力である」(前掲書, 276 ページ), と言われる。しかし、この説明が、『批判』においてその実現が問われている交換価値の説明であるとすれば、多いに疑問としなければならない。行論が示してきたように、『批判』の交換価値の実現は、『資本論』の価値の実現と異なる概念規定である。

- 35) Kr., SS. 29~30 (訳, 46 ページ。)

平田氏は、この『批判』叙述について、筆者と異なる解釈をされる。平田氏は、「商品の使用価値としての生成は何を必要条件としているかを反省」するとして、「使用価値としての生成を、『富の内容』の実現としてだけ考察する場合には、この欲望主体たる人格の購買力能は、ひとまず捨象される。しかし、自明のことながら、それは使用価値としての商品の生成なのであるから、購買能力をともなった欲望との出あいが必要である。マルクスはこのことを、念のためにつぎのように書いている。『一商品は、それを使用価値とする人、すなわち、おのが特殊な欲望の対象とする人に対してだけ、

使用価値として譲渡される。しかしながら他方では、それは他の一商品と引きかえにだけ譲渡されるのである。』(前掲書、277～278 ページ。傍点は平田氏による。)、と述べている。問題は2つある。第1は、『批判』において、「商品の使用価値としての生成」の「必要条件」である交換価値としての実現は、果して「購買能力をともなった欲望」、あるいは「欲望主体たる人格の購買力能」を意味しているか、という問題である。これはすでに行論が示したように、『批判』における交換価値の実現は、商品の価値としての能力の実証を、したがって「購買能力」を意味していないことは明らかである。第2は、平田氏が引用される『批判』叙述は、使用価値としての生成が「購買能力をともなった欲望との出あい」を必要としているため、マルクスが「念のために」言及した叙述といえるかどうか、という問題である。しかしながら、平田氏の解釈が、引用されている『批判』叙述からどのようにして導き出されたのかが、まず疑問である。なぜなら、その『批判』叙述は、ある商品所有者は、自分の商品をそれを必要とする人・「おのが特殊な欲望の対象とする人」にだけ譲渡するだけでなく、他の一商品と「引きかえにだけ譲渡」する、と述べているにすぎないからである。つまり、ある「欲望主体たる人格」の他商品と引きかえての商品譲渡を語っているにすぎず、「購買能力をともなった欲望との出会い」、つまり他「人格」との出あいは、少しも語られていないからである。そしてこの『批判』叙述の意味は、平田氏の引用されなかった部分と合わせて始めて、明らかになるのである。すなわち、行論が示すように、ここでは、他商品と引きかえて商品を譲渡する場合の「他商品との引きかえ」が、つまり他商品の取得が、相手の側から、他商品の所有者による商品譲渡として説かれている点に、注目すべきであろう。なぜなら、それは、他商品取得の論理を欠く商品の一方的譲渡を示しているからである。

36) Kr., S. 29 (訳, 46 ページ。)

37) Kr., S. 31 (訳, 48 ページ。)

38) Kr., S. 30 (訳, 47 ページ。)

39) Marx, K., *Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Urtext ; Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861*, Marx Engels Gesamtausgabe (MEGA) II – 2, S. 56 (訳については、高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』, 大月書店, 第5分冊, 1032 ページを参照した。)